

雀「先達もあちた上村にボテが行つた時、丁度同じ時刻に反齒恒も上村に用向があつて、行く途で此村の出外で廿間計先にボテの後婆が見へましたで、ハアボテは何處へ行くのんかと思つて、追附ひて話しもつて同行うとて五六間位の處で、ドレ彌助君と聲かけようと思つて口まで出か、つた端に、ボテはブツと屁を一ツ放ひたのですつて

雀「ホー

雀「反齒恒はあちた朝ツばらから、屁を嚙まされて源糞は悪ひと思つてるうちに、又ブツ、二ツ嗅がしやがつたナと思てるうちに、又ブツ、これで三ツ指折てるど、又ブツ、ブツ、ブツ、

雀「ホーホツホツホ

雀「漸々放きよるを、此奴は放屁に妙を得てる奴だから、薄汚いことは汚いが、一体ドレ位放くか一ツ黙つて跟いて行つて、試め

して遣ふと恒山は思つて、臭さを辛抱して行つたんですと

雀「物すきた子

雀「處があちたボテの奴ホント悪い奴ですせ、後に跟て来るのは反齒恒だち、今日ほう奴に思ふ存分屁を呉れてやるから、難有く頂戴致せ、ボテ閣下のお腹の掃除するんだ、ヘン瓦斯會社から機關の代用に來て呉れつて、招聘の申込を受けてる乃公様だい、う奴長く跟いて來やがると、鼻が曲つて顔も何も黄色に變色つてしまふぞ、まだ問まわすに來やがると、黄色の霧に取り籠められて咫尺辨せずてう奴にしられるぞつて、ボテこう心で嘲笑つて、素知らぬ顔でブツ、ブツ、ブツつて行くのんですつて……

雀「ドウも大變強氣だ子

雀「ツノ放き振りは、同じ間隔を置いて、同じ大ききの音で、真に

長に用向があると、村長室の入口の處に直立して、所謂最敬禮で陳述するのです

春『威張つたものだナ』

雀『エーエーその剛愎と言つたら星亨でも及ばいのですせ、村の人は蔭では糞ケナシにけあしてますけれど、前に出るとチエーの聲も上らひそうですから、村長の奴さん倍々増長して、威張倒してゐるんです、人があかた何か長々と陳述しますよ、碌でもかい乞食髯を捻りながら、病でる馬は鼻の穴を蚊に刺された様にフームフームつてぬかしてますから、癩に障わら』

春『ヒドク君も慷慨悲憤したものだナ』

雀『ご奴にもつて行つて、屁を喰らはして遣らうと言ふ、ボテの大謀反ですから面白ろいんでサ』

春『ボテ氏は大敵をねらつたものだナ』

雀『中々うい奴で内々役場内の様子を探ぐつて見ると、小使丈は拭き掃除等の用事もあるで、村長室へでも自由自在に入れると言ふことを知つたのださうで、小使に頼み込むでその差支で欠勤する時は是非代理に雇ふて貰ふ様にしたのですて、疑つたものですか、

春『深遠ある策略だナ』

雀『すると四五日して小使の代務に役場へ出ましたが、何んでもうまく遣らねばならぬと思つて、コイツ一ツさぐりを入れて見ようとして村長の機嫌の良さを折を見計つて、且那サンあかたは真におエライお方で、此村の殿サン、吾々人民はマア家臣ですが、そこでです家臣と申すものは、情として殿様にお玩弄に自分の得意にして居ります藝當を、御覽に入れたいと思ふものですが、私の得意十八番にして居りますのは、屁を放く藝當で

御座りまして、臭ひのでも又無臭無烟のでも、又曲屁の色々と面白いのでも、ドンナでも放きまするし、人造舌でもありまして、けつ穴に鼻歌でもイヤ尻に鼻はありませんを、物言はせて御覽に入れられる位ですが、一ツ且那御ひまを時お宅へ上りまして奥様とお揃ひの處で、至極く臭ひ音の面白ひのを放いて御覽に入れ度と思ひますが、とポテは恐縮の体で言つたのですて

春「うまいことを言ふ子

爺「處がおこせ村長大變機嫌のよい時であつたと見へて、イツに面白いニヤリ笑つて、彌助そちは屁を放くのは上手か、それは面白ひね、しかし乃公は屁の臭と言へば、世界に於てアンナ厭やなものはあいのだから、役場へ出勤する間は、屁を放かぬ様にして呉れ又臭も同様屁が嫌ひだから、放屁を見せて呉れなく

つてもよいと言ふんです

春「尤もだ子

爺「處でポテはハハアこん畜生屁が一番嫌だと、吐して居やがる哩、今に見て居れポテ閣下の、一世一代と言ふ臭ひ奴を喰らわして遣るから、楽しむで待つて居やがれと、心で咽を鳴らしてるを色にも見せず、態と追従笑して、ハハア且那サンは屁はお嫌ひですか、私は屁の名人ですから、放こうと思つたら今言ふて今ドンナ臭ひのでも、ドンナ面白いのでも直ぐ放きますが、又放くまいと思つたら一年でも放かないんです、ですから役場に出ましたときは、屁の破片も放かぬことに致します、何分且那に可愛がつて貰はねばならぬのですからと言ひましたと、スルトおこせドンもやさしく、ソウして呉れテつて頼むたさうです、このおこせドンが頼むて人に詞を下げたは、後にも先きにも

があつた折を以て、松山の貨幣談を聞かせて貰ふつて来て貰つたのです……………

春『それは結構だつた子

春『松山サンは男振はよし、辯説も流暢でしかも輕薄に流れず、論理が明確で考證が該博てふ奴で、ソレニ百姓等によく解る様に講演しましたが、中々天晴れでしたる

春『ソウだろう子

春『色々と言ふものは賣買の媒立する役のものだとか、人間は進歩すればする程、多額の貨幣を使用するものだから、本位貨幣の物質は高貴のものが必要にあつて来る、寶石は分割すれば價值を落すし、白金は産額は少ひし、だから金は世界の最良本位物質だ、とて大昔のことから、世界各国の通貨の狀体から、色々引いて来て、目下日本が金貨本位を採用するは、絶好

ある時機だと言つたです

春『感心なこと子』

春『本論を終つて尙参考の爲めにつて、ユウ言ふことを言つたです

春『原來貨幣の効用と申すものは、前きにも述べました通り、賣買の中立なかたちをするにありまするので、此働きを能く完全に勤めたならばそれでよいのです、本位貨幣の物質の有價物を要しまするは、所謂つぶしの利く様にと萬々一の場合を慮つてのことでもあります、世界共通の信用制度は今一層發達したならば、各國の中央銀行は本位貨幣の準備を要せず、其政府の監督の下に發行したる紙幣のみで、此賣買の媒立たる貨幣の役目を完全に勤めさせる事の出来る日は、來るであらうと思ひまする、要するに貨幣はその者のみにては余り價值のあいものであると言ふことは、今日では一般

學者間の定説にあつて居るのです

乍併素人衆ではまだ、貨幣と言ふものは、單獨にて非常な価値を持つて居るものだ、と誤解を抱ひて居る人は澤山あります、貨幣と言ふものは誰も彼も欲しがらる良いものでもあります、併しこの欲がる譯は、ドンナ好物でも買へるドンナ好いたことでも出来る、今買はなくても何年かの後でも使はれる、即ち賣買の中立に使ふことは出来る爲めに皆欲しがるのであります、若しこゝに貨幣五千萬圓でも一億圓でも興^やるから、藏の中へ大切にしまつて番をして居れば此金はお前は原より、子々孫々お前に關係のあるものは、一厘も使ふことはあらぬ、と言つたならば貰ふ人は一人もあかろうと思ひます、よし貰ふ人はあつた處でその人がその貨幣について仕方がないのです (喝采)

使かぬ貨幣を死と同じだと言ふことを、よく言ひますが是は貨幣の役目をよく説明したもので、賣買の中介に使はぬ貨幣は實に死と同様の価値のもので御座います (喝采) 素人衆の此誤解を抱くことは無理のあいことで、學者でも中世否凡二百年以前迄は、此誤解は一般に抱かれて居つたので此學派は貴金説と名稱を付けられて居ります、此貴金説を駁撃するに、學者の引用した面白ひ神話がありますでお笑ひ艸にその神話を申し上げて、今晚のお終と致たします (謹聽)

昔しフリジャ國の農民が寄合つて、バカスの神の師シレナスと言ふ者を生け捕りまして、國王ミダスの前へ連れて行つたところが、ミダス王はソナ事してはイケナイと言つて、放免してバスカ神の家へ歸して遣りましたところが、

パスカ神は大變喜びまして、ミダス王に何物でもお前さんのお好きなものを差上ります、お前さん何がお好きですと訊きますと、ミダス王は大變お怒りものと見へまして、私の身に觸れるものを皆黄金にして下さいと言つたら、パカス神はよろしいつて許可したので、翌朝ミダス王は起きて見たら寢床は黄金にあつて居ます、手水遣ふと思つて井戸場に行つたら盥は黄金水も黄金、手拭も黄金齒磨も黄金、朝食に向つたらお膳は黄金、箸もお椀も黄金、パンも黄金肉類も黄金、酒を飲うと思ふたら黄金、水も茶も黄金となりまして、飢渴に迫る様になりまして、死に瀕するに立到りました、そこでミダス王は泣き悲みましてパカス神よドウゾお慈悲に賜はりし黄金を取り上げて下されと、祈つたらヨシヨシとパクトラス河と言ふ處で王の身体を洗はしめまし

たら、ミダス王は元の通常の身体にかりまして、農業と狩獵に勉強しまして、今度は賣買の仲介にある貨幣を澤山、儲けまして富者になつたと言ふことであります（喝采）是で金は獨立しては價值なきものと言ふことは、お判りにありませんよう、今晚は此丈に（拍手大喝采）

春「ホント能く出来る人だぞ」

春「此大演説はすむと同時に、「只今の先生の演説について、感じたことはあります、皆さんに御話したいと思ひます」つて北の隅の方に起立するものはあります、満場の視線はこの聲の主に集りました、よく見ますと起立してゐるのは、ボテの野郎じやありませんか、

春「ホー」

雀「スルトあなた「止せーく」と言ふものはあり、「遣るべし大に遣るべし」、「演壇に上れ！」と言ふものあり、場内は一時混雑しましたが、トドポテめが二三の若者に擁せられて演壇に上りましたのですせ

雀「これは又甚だ乙力だ子

雀「演壇上のボテは又奇天烈観でしたせ、茶縞木綿の布子を着て羽織はなし、着物は丈は短く身巾狭まいのですから、裾から鼠色に汚れた白紋羽の丸行燈式のパッチは二本、ニューと出てまするし、袖からは同じ紋羽の吾妻形の襦袢の袖口は出てまさー、筋入小倉の帯を後で貝の口に結た處は、淡路人形の百姓ソツクリですナー

雀「ハハハハ、ハハ、ハハ、

雀「皆が笑ふやら冷やかすやら、大變な人氣です、ボテは場内の喧

囂の靜まるを待つと言ふ顔つきで、紋羽吾妻袖口から出た兩手でもつて腰を支へまして、すまし切つてゐるのです、

雀「ホント度胸のよい男だ子

雀「暫くしてヤ、靜まるのを見計つて「オホン」と、余所行の咳ばらいして、コウ言ふんです

ボテ「諸君、乃公は只今の松本先生の演説を聞いて、大にやるほど心こころに浮んだことは有ありさるから、これを皆に聞いといて貰ふと思ふ（ボテボテと言ふものあり）、乃公のボテてふことは昨日今日に初まつたのでない（大笑）今先生の言はれはるゝには黄金はそれ丈ではねうちのあいのものだとは尤お話と思ふ（自轉車こを放はなして見ると言ふものあり）、曲まは演説すむでかい放はなしてやる、八ヶ間敷言ふと鼻も口も目も開あかれぬ様ようを臭くひ奴を喰くはずぞ（大笑）、黄金は山吹

色である山吹色のものは皆物の中立なかたするに出来たものだ、吾々は縁薄いか黄金と出逢ふたことは余りない（笑聲起る）、が他の山吹色のものとは甚だ親しむで居る（松山の口調）其は外でもあいつ穴から産出する糞と言ふ貨物である（臭いとて鼻つまむもあり、又初めやがつたと言ふものあり、止せくと叫ぶものあり、一時非常の喧囂）、この山吹色はナンボ色がよいと言つて、試にミダス王が黄金に出逢つたように諸君がこの糞づくめに逢ふたとすればドウデあるか（馬鹿！止せ！）朝起きて見たら寢床は糞、手水遣ふと思つたら、盥は糞、水も糞、手拭も糞、朝食に向ふたらお膳は糞、箸も糞、お椀も糞、飯も糞、茶も糞、肴も糞、漬物も糞、（臭い！臭い！）、婦の顔見たら糞（大笑）翠丸握つて見たら翠丸も糞、（大笑）雪隠に入つて尻

から出る物見たらコノ物も糞、（知れたことだ！、大笑）ハハハハ、、、家も糞も糞建であつたならば、近所隣は第一臭くて溜らぬでありせんか（演臺を一ツ叩く、大笑）支那の大學者孔子も此糞で建築して見よとて、しくじつたから此話も中々馬鹿に出来ぬじや、孔子サンは糞で塀を造つてコレへ妻君の像でも彫つて置ふと思つたのらしい、塀は築けたが彫りは臭くてか又柔らかくてかは知らぬが出来あかつたと言ふことじや、その證據は正法寺の和尚に聞いたが論語と言ふ本に糞土の塀は彫るべからずとあるつて（松山君大笑）

ですから此山吹色は獨り行は出来ぬ、黄金と同じだ、田畑に肥しにやつて土と作物の中介せしむるか、又は乃公の様に腹と尻との中介をさせて臭ひ曲尻に使ふより仕方がない

ものだ（拍手大喝采）

今晚はこれ丈に（松山の真似）

つて乙おつうすまして降壇したのですせハハハハ、ハハハハ、ハハハハ、ハハハハ、

春「ハハハハツハズバケた遣り方だ子……ハハハハハハハハハハ、ハハハハハハハハハハ、

雀「松山サンも余りの事で、アツ氣けに取られてましたせ、してコンナ奇談は今度の大學理財科年報に出すと言つてましたハハハハハハハハハハ、ハハハハハハハハハハ、

春「ハハハハハハハハハハ、ハハハハハハハハハハ、

人並の手で短くもあいに

テニズン（手二寸）とは是如何に

お婆サンの餡あんこさへてるであいに

パアンス（婆餡す）と言ふが如し

へ は こ や

雀「先生あの一昨年从此村へ來てる友田と言ふ家の隠居子

春「フムフムあの人國は備前とか言つた子

雀「ナンデも岡山近くの人てふことですせ、國では相當の資産もあり立派に暮して居つたそうですが、一昨年の春息子むすこはあゝた戦後の株式熱に浮かされて、悉皆遣つ付けてしまつたのですて

春「近ちか慾よくものは得手してそうある子

雀「ソレデ處に居るも不面目と言つて、トド此村へ來たのだそうですが、此頃は息子も大分だいぶよく稼ぐ様になり、投機もフツツり止とどまりましたとて隠居も安心してまサー、ソレハく善よい人で、年もソウですあまだ五十四五です、デあの方は大變を淨瑠璃好で、

中々淨瑠璃の質は宜しいそうです、處が若い時疱瘡でコウあつたのだつて、口は横へ捻ぢ歪むで、顔も彼ち此ち凸凹になつてますで皆備前徳利つて綽名してゐるのです

春「ハハハハ、ハハ、ハハ、」

春「ソレニ鼻はへ茶張つて、時々鼻へ詞がかゝりますで、皆がアリヤ疱瘡じやあい、キツイ微毒かいたのだろーと噂してますが、氣を落付けて詞遣ひすると割合鼻にかゝりませんが、急込んで來ると丸で微毒かきソツクリですナ

春「氣の毒だチー」

春「デ此春頃から久良馬連の中へ加入して稽古してゐるのですつて、あの連中は皆金太郎ばかりで、淨瑠璃と來たら頭に煙草の吸殻載せられても知らぬ人計で、此村は知れたこと近郷近在まで、座敷淨瑠璃を引つけく催してゐるのですが、友田の隠居も咽

か鳴つて溜らむのだそうですが、自分の鼻が悪るいし殊に他國で耻かくもと思つて、稽古丈樂み語りにして一向床へ出語りに上らなかつたを、連中が皆誰がコンナ下手やつたことはある、誰かコン失策した、甲はコウ乙はア一つて失策話を列べて、隠居に勧めたもんですから、隠居も此節ヤツと出語することにゑつてゐるんです

春「素人太夫の失策は却て愛況のあるものだ

春「隠居に話した連中の失策談の中に面白ろいのはありますせ、先達て松茸定は中臣藏の勘腹を語つた時、勘平は腹を切つた處で夜前彌五郎に訣れて歸る途すがら、山を越す

まで天晴無事に語つて來てその次の「猪に出逢ひ」を絶句して一寸行き止まつたものですから、傍に聞いてた定公の兄貴はししと言ふも氣加利かぬと思つたのか小聲で十六のかけ算と言ふ

すと

春「ハハハハ、、、罪がふいす

雀「大罪安はあまた、日吉の三、五郎助住家でお政の口説、『年月へだつ其うちに、もしや見捨はあさりよかと、祈る神様佛様の處で千両幟稻名川内おとわの口説『佛様への精じんも、戻りやしやんして顔見るまで、案じて夜を寝ぬ』にかわつて、二段織ぎ合せに語つたんですと

春「ハハハハ、、、

雀「如來辰は自宅で席したとき、淨瑠理が下手ですが、闇取でドツサワが當りましたで、何んでも美味くやらねばならぬと、前から力んでましたが、自分の番が来て語りかけますと、皆がワイワイ言ふて冷かしますで、目を瞑つて一生懸命に語つてますと、三分處まで大分冷かし聲が少くありましたで、ハハア大

分乃公の語りぐあい感心して來たナと思つて、語つてますと半分頃からは一語も發するものがなくなりましたで、愈々感心し切りよつたな、水を打つた様とはこのことだ、今夜は久ぶりでイヤ初めて當りを取つた哩とて、目を瞑つた儘で倍々力んで語り終り、目を開いて見たら、靜か答は聽衆は皆歸り去つて一人も居らない

春「ハハハハ、、、

雀「行燈吉は此中淨瑠理を始めて、玉三一段丈上りましたのですが又風船丑は三味線の稽古で、これも玉三一段丈上りましたで、よい相方だつて先達の會に、語まするは行燈吉太夫に三味線風船丑で露拂を勤めましたで、桂姫の口説の『ねぐら離れし時鳥』の處で、丑公ヨーツと掛聲してテンと弾ひた拍子に、三の絲はプツと切れたのです

春「ホー」

雀「そこで太夫サンはまごついて、それはコウ弾く處だと心附けの積で、ツンツンチントンツンチンチントント、ンつて口で三味線弾くう、三味線風船丑サンは、コ、はコウ語る處を弾ひてる積だとの氣付で『子で子にあらぬーウみづーからーをッ』と小聲で語りつゝ、三の絲の細工しますけれど、上氣してますで容易に出來ず、トド太夫と三味線と振り替つた儘で、口説を語つてしまつたのですと

春「ハハハハ、ハハ、ハハ、」

雀「まだまだ澤山ありますが、失策談は罪がないですな

春「ソウだ失策が面白ひんだ、コウ言ふ失策は大變な趣味があるからナー」

雀「連中が銘銘の失策談をさらけ出して、マンマと友田の隠居を床

へ上がらせる様でしたが、隠居の失策、鼻のですを、と言つたらすばらしいものですつて

春「ソウかナー」

雀「勢州阿漕の浦平治内の段で、庄屋の彦作の詞『コレコレコレ平治、腹立てまいぞへ〜、腹、立てまいぞへ』と言ふを、三遍目の腹立まいぞへは、急ぐ様を押へ付たようを振でしつかりと言ふところですが、隠居『コレコレコレ平治腹立てまいぞへ〜』までは緩り過ぎるが無事、其次に至つて狎が何物かに吠へる様に、顔をしやくめ、首を上下左右に急ぎ小ゆりして、『ハナハヘマヘホヘー』

春「ハハハハ、ハハ、ハハ、」

雀「關取千両幟で、最も聲張り上げて語るへき、『鉄ヶ嶽陀左衛門』と言ふを隠居『ヘフハハキハハエモン』

放る尿^はることのみして人^でおいに
ヘルバルト（放る尿^はる人^さ）と言ふが如し

錢筒太夫

雀忠太ある日途上、ボテに出會^{であ}けるに、ボテ心持悪くせしむる程の
笑顔を作り

ボ「雀サン今日は、ドチラへ御出^{いで}ですか、宜^{よろ}しい天氣様ですナ」

雀「ヤア彌助君か今日は、ドユへと言ふことをしに、其處らへブラ
ブラと………」

ボ「春篋サン方へ御出^{いで}ですか、春篋サン處^{ところ}では中々此ボテなずの話
も澤山出るてうことですナ

雀「君が随分面白いことを數々やるから、春篋サンと贊辭^{ほめ}てばかり

居るんだハハハハ

ボ「ハハハハハハハハハハ、私も一寸そこらへ行くんですから、お同伴^{どうはん}し
て面白いお話、聞かせて頂きましょう………時に雀サンあるた

此あとの久良馬會へお聞きにお出^{いで}でしたか

雀「行つたとも、面白かつた子、アノ友田の隠居の淨瑠璃てへば、

日本一だ子ハハハハハハハハハハ、

ボ「アノふがく、太夫ですかハハハハハハハハハハ、皆よく出来ます子………」

雀「ハハハハハハハハハハ、

ボ「アノ晩、新寶熊は仙臺萩の御殿を語るに、「七ッ八ッから金山
へ」と言ふよろし節の處を、上氣しやがつて「ひちッはちッか
らさん山へ」て語つてましたナ

雀「ッウッウ、ソレでも三味線には、テキツと合^あつてたから、感心だ
つたナ

雀「ハハハハ、、、、皆中々うまいナ

ボ「ケンケヲ政は、ナニあれは張子虎太夫だ、首ばかり振つてるからナ、と言ふんです

雀「ハハハハ、、、、

ボ「ナニあれは蒲鉾屋太夫だと言ふのはツンボ竹です、見臺の板を叩いて計り居るからナつて

雀「ハハハハ、、、、

ボ「水入龜はイヤあれ等は生松魚節太夫だ、節がまだ固まつてゐから、松魚節の固まつてないのは、生松魚節だつてんです

雀「ハハハハ、、、、面白いな

ボ「ガタガタ徳は、アリヤ尺八太夫だ、節を筒抜けに抜ひてしまつて、横の方へ聲は澤山洩れてるから、つてんです

雀「ハハハハ、、、、

ボ「井辰はソリヤ君等違つてる、アレは傘の柄太夫だ、上のよい節はズンベラに削つてしまつて語つてるから、と言ふんです

雀「中々よいナハハハハ

ボ「此連中は寄合つて、ワイワイ話すると、自慢じや御わせぬが、皆私を議長々々つて議長にしてゐるんです

雀「ホー

ボ「テ議長の意見で皆が尋きますで、私は久良馬連中は皆錢筒太夫だ、理由は口の中でモガモガと造り聲ばかりして居て、一生懸命の聲を張り上げる事は出来ぬで、自然太い節は抜けてしまふ、太い節を抜いて、口に錠下ろしてゐるは、錢筒じやあいかど決をとつたのですハハハハ、、、、

雀「ハハハハ、、、、議長は議長丈だナハハハハ、、、、

雀「ハハハハ、、、、

ホ「ナンでも物言はせなくてはと思ひまして、ソレからの苦勞は又格別でしたか、幾夜もくゞ寢ずにやりまたが、何にも言ひませんか、只ブーとかブーとかポーとかピーとかスーとかばかりで、詞のあやちは判かりませんナ………

雀「ハハハハ、、、、

ホ「げん糞の悪るいけつ穴だと思つて、自分ながらも氣が盡きて、腹の立つ時もマ、ありますせ、デこれまで一心になつてるんだから、せめて自分の名丈でも言はせる様にして置けば、又便利かともある、食事でもして口の塞ひでる時、お前誰かと尋ねる人はあつたら、尻でポテて言はせばよいと思つてナ………

雀「ハハハハ、、、、モ一止して呉れ、溜らなくなる！
ホ「ポテと言はせようと思ふて、又疑りましたナ、ナンボ疑りました

ても都合よく行きませんが、ポーとは大きにでも小さいにでもドンナでも出ますが、テーで薩バリ言ひませんがー

雀「ハハハハ、、、、

ホ「ポーと大きく放いて、口でテーとあしろても言ひませんが

雀「ハハハハ、、、、

ホ「ポーと放ひて、テーと尻を頷づかせて見ても、あきませんが

雀「ハハハハ、、、、

ホ「エ、咄辨をけつ穴だナと、腹立ちまぎれに唇叩いたら、矢ッぱり自分が痛いんですが

雀「ハハハハ、、、、

ホ「雀サンあんた方お素人衆の知らぬことですが、屁の中ではこのポーと言ふ音に底力のあい奴は一番臭さいのですせ、この一番くさい奴を私は二百四十計、このポテと言はせて見る爲めに、

嗅がされたのですハハハハ、

雀「ハハハハ、」

「ソレカラ今度は頭から遊藝を仕込むて見ようと思つて、貝左衛門の貝吹かせて見たです………」

雀「ハハハハ、」

「アレはデレレンデレレン、フンデンデレデンデン、と奴でしよう、此方はブルンブルン、ブルルンブルルン、と言風にやることにして、稽古に取りかゝりましたが、處ブーブーブンブーブーンブーンブーンとしか言ひませぬ」

雀「ハハハハ、」

「尻の穴も、かさかきと一ツで、ラリルレロの行は言へませぬ」

雀「ハハハハ、」

「一時はかつかりしましたが、雀サン人と言ふものは考へて居る」

「とよい智恵が出ますか、私はフト口はドウ云ふ構造の故で物言ふかと、考へて見ました、舌あるを以てなり判りが早ひですか、尻の穴に舌なし、手を拍つて喜びましたナ、人造舌を作るべしと落ちて來ますからナ、そこで人造舌の發明することに、此節は苦心してますが、雀サンをんぞよいお考が御座いませぬか」

雀「ハハハハ、」

「明が出来るだらうよハハハハ」

「雀サンそう侮るものでありません、此が發明出來たら私が興業ものに使ふ丈じやないのです、第一盲啞學校の啞生に必要でしょう、あなた方通常の人でも便利ですせ、口は御飯食へてる尻が人と談判してるですからナハハハハ、」

雀「ハハハハ、」

「人造舌を發明したから、私も結構を身分ですが其迄は困ますか」

雀「ソレは良かつチ

ボ「アノ時も、ケンケラとガタガタと水入と私の四人ですが、水入
龜の家でやつてたんですが、矢張丁半ですせ、あの晩私が余程
敗がされましたな、在り丈皆半から行つたんです、スルトケン
ケラ政もガタ徳も皆半からですが、水入はあなたヨシ皆向ふう
たつて、片山勝負ですが、大きいでしょう、半方三人はタクロ
ウ行ことなつたんです、強氣ですあー

雀「フームそのタクロウて何だい

ボ「ハツ雀サン鈍くさい人だナ、タクロウ知らない！、タクロウ
つたらな骨子の目取ですがナ、吾々の三粒骨子ですから、
目が三ツ出るでしょう、その三ツの目に五と二とあつたら五二
三と四とあつたら四三、一と六とあればけつ六、一のことを丁
半仲間ではケツと言ふんですせ、余所で耻ぢかゝぬ様、よく胸

に疊み込んで置きチハハハハ

雀「ハハハハそんなこと知つてたら、耻にあらー

ボ「ハハハハそうでしたナ、兎に角ケンケラは四三、ガタは五二、
私はケツ六、コウ乗りましたナ、乗つた目が出たら、皆の賭け
てあるのを獨で悉皆取るんでサ、コウあると皆元氣づきます
せ、手に唾してパンと拍つものやら、急に向ふ鉢巻してアグラ
組み直すものや、大黒柱を角力の稽古の様にヤヤヤつて押して
見るものやら、片腕を巻くつて差し出して平手でヨツつて叩ひ
て見るものやら、エライ景氣でサ、骨子は水入の投る番で、
龜公右の手を高く腕巻りして、サ、皆エ、カ、投るつて、骨
子握つてハツと投る氣合を入れた處で、表戸はガタガタ………

雀「ホー

ボ「龜公氣の早ひ男ですから、巡查だ逃げろー、つて自分が骨子を

歸つて、蟬の老婆が納戸に一人寝てたんですが、警官はその老婆を起して訊問してる様ですナ、殿しい聲でユラ今こゝに賭博してたは誰々かと問ひましたら、老婆の聲で、お前サン等早ひことですナ

雀「ハハハハ、、、、、

＊「金槌ですからナ、警察官は躍起の様子で、賭博したのは誰かと云につて、平民から耳がツン裂ける様を聲だに、蟬は氣散じあ者ですナ！老婆、モー夜は明けましたか

雀「ハハハハ、、、、、

＊「大きい聲で色々言つてましたが、何の聞へますもので、アレハ手綾であくては話が出来ぬのですからナハハハ、、、、巡查もあぐんだと見へて、場錢もなし證據の擧げ様があいつて、コボシもつて皆引上げたらしかつたですが、此方は中々氣が弛みませ

んが、ナンデモ龜公の聲のするまでと思つて、トド五時間の上摺り糺の中に潜り込むて居ましたんですせ、はし搦くつてく縮上る心地がしました、ヤレヤレ賭博丈は孫子の末まで止よと、その時はそう思ひましたナ

雀「ソレで止めると見上げるんだがナ

＊「ソウですな、二度目はケンケラ政の古土藏の二階で、矢張丁半やつてたところを見付かつたんですが、役者は同じく右の四人でサー、此時は皆ビシビシと縛られたんですせ、一方戸口でするからナ、雀サンあんたも一方戸口の藏で、賭博うちをさんな、心得ごとですせ

雀「又吾輩に注告か

＊「ハハハハ、、、、此時はまだ大した勝負してなかつたんですが、あの藏は空屋で何んにも入つてませんのです、政の野郎入れ

るものがありもせんに、アンナ藏は毀つとけば何の災難もない
 んですがハハハハそりや此方の勝手ですあハハハハ、ハハハ、二
 階で小さいことしていると、藏の戸はガタガタと言いますと、龜は
 逸早やくサー来たぞつて、藏の金網を破りにかゝつたです、そ
 こから跳び下りる積であつたのでしよう、すると金網のある處
 は、階下からよく見へますので、巡査は見てユラ龜ツつて、嚴
 しい聲で叱りましたから、龜公も名を呼ばれたもんだから仕方
 がありません、へ恐れ入りました、皆静まれ！つて龜公言ひま
 すで、ガタガタしかけた者も静まりましたんです

雀『ソウあれば仕方がないナ』
 警官は心得たもんです、私は直ぐ二階へ上つて来るかと思つ
 てたら、静に一人宛下りて来い！、コウ命令しますじやありま
 せんか、成程輕卒に上つて来てモシ抵抗でもしられると損です

からナ、スルト龜は、へイ心得ました皆静に下りるんだぞと、
 大聲に言つて、ソシテ私の良と藏の西側の方とを、ため合して
 目配ばせしといて、自分が静に下りて行くじやありませんか
 雀『ホー』

『フト西側を見ますと、古長持があつて其中の狭い方の板はすつ
 かり取れてありまして、其側は上り口から直に見へぬ方にあつ
 てますで、屈竟の隠れ場ですがナ、流石仲間で兄貴顔する丈
 ある哩と思つて、下へ聞へぬ様コソコソと長持の中へ匍匐こみ
 ました

雀『美味いことしたナ』
 『續ひてケンケケもガタガタも頼ひもつて、下りました、下では
 警官の聲で、モ、これ丈で居らぬのか、龜の聲ではつきりと
 コウ三人限りです

の本字知りませんが、暫く考へて解らんもんですから、部長ボテとドウ書くか子つて、部長に問ひましたら、部長にも解らむと見へてサーつて考へ込むでましたせ

雀『ドコまで阿保言ふか判らん人だあ』

*『署長はボテとは私の姓だと思つたのですを、部長に本字考へさせて置いて、手廻はしに名はと訊ふんです、私はボテ、署長は名だ名だ、名は何と言ふか、私は矢張ボテ、姓名でボテですと言つたら、署長は姓はボテで名はテか短い姓名だナつてんでしよう』

雀『ハハハハ』

*『署長も部長も首を捻つてますがナ、是はボテの本字を考へてるんでしよう、私もこりや何でもボテで處分を受けて置かねばならぬ、本名では戸籍が汚れるから、人造舌を發明して出世したときに困る、若し今にもボテとは本字で、ドウ書くかと訊か』

れたら早速答へる様にして置かねばならぬと、盗人捕まへて縄、じやない署長つかまへて本字ですが、ボテのテは手足の手習の手でよろしいが、ボテに困りましたな、棒だらの棒、坊主の坊、盆くらのボ、考へはよろしいのは浮むで來ますが、本字はドウ書くか浮びませんナ

雀『ハハハハ、』

*『まっすぐに縦棒引いて、一手、こうしといて遣ろと、ヤット考へへの附いたとき、政の野郎雀サンあれだから、ケンケラと言はれるんですな、差出口しやがつて、旦那ボテてうのはそ奴の縛名ですせつて、コウ素ツば抜いたじやありませんか』

雀『ボ』

*『うかれ節の文句じやないが、燕雀何を鶴鴻の志を知らん、政の野郎人のむほんを台なしにしてしまやがつたんです、部長と署』

長と顔見合せて笑つて居ました、蹈める男だナと感心したのんでしよう、署長は本名は何と言ふかと改めて訊きますで、私は署長サン私をボテで處分して下さい、その方はお上の爲方たかたにあるじやありませんか

雀「ソリヤ又奇妙なことを言ふたものだナ」

署長も理由わけ訊きますで、私はコウ述べました、署長サン私は本名よりボテテう渾名の方が、世界へよく鳴り響ひてありますで、そのよく通つた名で處分しあつた方が、官の徳益になるのんですせ、何故つて考へて見て御覽あされ、常陸山でも梅ヶ谷でも、團十郎でも菊五郎でも、博奕で捕まつとして御覽なされ、戸籍にある本名誰のことやら世間で知らぬ名で處分して御覽あされ、肝心の日本國中にっぽんくわうちゅうに通つてる、常陸山梅ヶ谷團十郎菊五郎は、さ・よ・ろ・り・く・わ・ん・ですが、それよりはよく通つた替へ名の

方で罰したから、本人もキツク應へるし、世間もビツクリしますがな、私もそれと同じでボテで、處分しあつた方は、警察に徳が行きますせつて、説諭したのです

雀「ハハハハ」

矢「張署長サンエライですな、雀サン相手にしませんわ、「そちも常陸山や團十郎の様に日本中に通つてあれば、そちの言ふ通りボテで處分してやるが、ボテてふ名はまだ當署すら知らぬ位だから、今度は本名で處分受けて置け、本名は何か」とコウやさしい振りで言ふじやありませんか、コレには流石のボテも参りましたナ、仕方がないから狸山彌助、狸山のたのは、たぬきのたののですせつて、此方から本字教へて遣つたつてんです

雀「ハハハハ、ハハハハ、ハハハハ、」

雀「ハハハハ、ハハハハ、ハハハハ、そんな苦勞してまだ博奕、止めないのんかい

「實は雀サンあれで、懲りくして、今では五厘のこともせず、人造舌一心でサーハハハハ、、、」

雀「ハハハハ、、、」

聖王を賊する樂紂の徒でないに

ギョーテ（堯討て！）とはこれ如何に

汁で舌の廻はらぬ程酔はれぬに

シルレル（汁れろ）（廻らぬ舌）と言ふが如し

千 一

雀「先生、暫くでしたナ」

雀「ヤア雀君、此中は一尙見へかたナ」

雀「時に先生此あと私はボテに逢ひまして、色々話を聞きましたか、追々にお話いたしますが、アレは快男兒ですナ」

雀「面白かつたろう子、早く聞かせて貰ひたいな、ボテの屁話をハハハ、、、」

雀「ハハハ、、、」

雀「ハハハ、、、しかし先生須山サンの二男群三君子、あの人は昨年迄東京帝國大學の文科に居つたんですが、二年迄済して止して歸國つたんですが、以前は秀才の名は高かつたんですが三學年の中頃でドウした者が、フト氣が變つて金は遣ふ、法羅は吹く、勉學はおろか眞面目なこと、一ツもなしで須山サン困り入つてますんですが」

雀「年少有爲の身を以て、惜ひ者だね」

雀「何か考へるところがあつて、所謂韜晦て奴をやつてるんだらうと思ふ節が、おきにしもあらずだ相ですが、直ぐ尻の剥げる嘘

雀「何か考へるところがあつて、所謂韜晦て奴をやつてるんだらうと思ふ節が、おきにしもあらずだ相ですが、直ぐ尻の剥げる嘘

を吐いて歩くもんです、人は皆群三君のことを千一と渾名してますのでサー、千の話の中で一ツ位ホントの話があるだろうとの意味だそうです

春「困つたものだナ」

雀「此節何の目的とてもあいが、満洲から沿海洲を一度見て來るつて、朝鮮から満洲へ出てそれから浦邊方面へ廻つて、先月の末に歸りましたが、此村の人等十人計寄合つたとき、丁度群三君も來合したで、滿韓談を聞かせと皆がせぶつたのですと

春「聞きたいナ」

雀「ナニあゝた、眞正を話が一ツもあいで、コンナこと言つてるんですと

群「僕は最初馬關まで瀛車で行つたが、馬關で驚ひたナ、あの馬關海峡は日本の關門で、海外貿易上必要な處だが、海

峡はそうだと大い巡洋艦が三四隻並むで、通過したならば兩岸に手が届く位だが、まだ一萬噸以上の軍艦を通して見たことはないのだ、内務省でも此關門海峡の開鑿には非常に苦心して、當年の議會へ巨額の繼續豫算を出すと言ふことだ、是は尤もことで早く開鑿しかいと、萬一の時國家の不利益だからと、僕が見て余り美事に驚いたは、此關門海峡をた、日本の總軍艦、二萬噸近くの戰艦を初めとして巨大な裝甲巡洋艦や砲艦、驅逐艦が百何十隻一列に列んで通過したのを見たからだ……

すると聽衆の中から「ソナ狭い浅い海峡をよくそう並んで通れたのですナ」と言ふものがあると

群「イカにもソウであつたナ、嘘は剝げたナハハハハ
こう言ふ風ですが

卷却て面白いナ

群 朝鮮人は物見高いと聞いてたが、釜山に渡つて僕は驚いたナ、丁度京釜鐵道に乗ろうと思つたら、朝鮮人は何萬人つて汽車を取巻いてるから、何事かと聞いたら、此人々は皆汽車見物に來たのだ、十日も二十日も旅して田舎から見に來てる人は多いと言うがナ、僕は目を丸くしてる中に、汽車は動き出すと、丁度日本の祭禮に御輿の前後に人がついて行く様に、汽車の前後にレールの上をヤーヤーつて、ついて來るんだ、朝鮮のお乳母サン杯は、子に乳房を囓へさせながら、ヤーヤーつてついて來るんだ、次の停車場が來ると皆一服やつて、動き出すと又ヤーヤーつて來るんだ

群 朝鮮の汽車は、ソウ走るのは遅ひんですか

群 ソウだつたナ、日本のより少し速力は早いんだ、嘘は剥げ

たナ、ハハハハ

卷面白ろいナ

群 京城では藥屋の多いに驚いたな、朝鮮人は小便を藥にする宮中でも便童と言つて、藥小便を放かせる童子を、月給で抱へてあると聞てたが、ア、アもあと思つたナ、京城ではどの家でも此藥小便を内職に賣つてるんだからナ、一人毎に古代高麗焼の小便瓶一ツ宛あつて、放る時は座敷の中で便壺へやらかして、此瓶へ貯藏して置いて、買手があつたら、長方形の朝鮮楯で量つて、卸でも小賣でもするんだ、直も高下あるんだ、若い別嬪サンのは、一等藥で直が大變高ひが、お婆さんのは一番安い、口で奴は賢い奴で舌ざんとつて見ると、若便と婆便は直ぐ分かれると朝鮮人は言つてるんだ、癡病と疴瘡の小便は錢にあらをいんだ、若し

之を賣る者があつたら、便藥變造罪に問はれるんだ、デこの賣上金はドノ家でも皆放尿者の所得にして居るので、此收入で盆正月の晴着を買ふことにあつてるんだ、だから盆正月の衣装は娘サン達のは、一番立派でお婆サンのは一番まづいのを以でも證據だてられるのだ、要するに京城は皆内職小便屋の都市と言つべしだ

春「ソノ小便は日本人が買うのんですか」

群「イヤ日本人でも支那人でも、乃至西洋人でも決して小便は飲まない、小便飲みは韓人丈だ

群「スルト賣る家はかりて、誰が買ふんです」

群「ハハハハソーだ子、又嘘は刺げたハハハハ」

雀「仁川でも又一驚を囁ぶつた子、仁川は韓國中での貿易港だ

が遠淺で汽船が遠く沖に錨かるのだから、荷役に困難するんだ、この荷役困難は仁川を非常に強く打撃して居るじやデ築港をしなくては仁川全滅すると皆慮へて居るんだ、軍中將の肝付サンや山内サンなども心痛せられてると云ふことだ、僕は仁川港を見るに、イカに遠淺だこれでは行かぬ哩と思つたナ、沿岸をブラツイてると、日露戦役の開幕に瓜生艦隊が撃沈した、ワリヤーク、コーレーツの二艦が手の足る處に沈むでるじやあいか、コーレーツの窓から覗いて見ると、露兵の骸骨は壘々としてるじやないか、濱寺や松山に來たのが陸軍の捕虜で、大きいと言つてもさほどに思はあかつたが、君等露國の海兵は大したものだせ、頭は蒲鉾屋の石臼位ある子、あれに肉付けたら奈良の大佛ツアン位にあるだらうよ、デ僕は名刺の裏へ「吊露艦將士之

英魂」と鉛筆で走り書きにして、窓から投げ込むで遣つたら皆目の穴から涙流して居たんだ

「遠浅の港にソウ磯近く大きな軍艦は入るんですか、骸骨が涙こぼすも奇体だぞ

「ハハハハ嘘は剥げた、二艦ながら三年程あと引上て日本に持て来て、宗谷號とか何々號とか改名して、常備艦隊に編入あつてるんだハハハハ

「奇妙な男だぞ

「平壤では僕は大變を拾ひ物したぞ、滿韓には小判が蹴躓く程あるつて、嘘じやないぞ、僕は平壤に行つて朱雀門を入れて大同門を見て、玄武門に行つて、それから市内を視察しようと思つて、朱雀門を入つたら、入ると直ぐ東京伊勢新の美術彫金の煙管一本拾つたぞ、拾へば又落ちてあり、又

拾へば又落ちてありで、大同門迄十町ばかりの處を徒歩する間に金の煙管、ふん張担一荷拾つたよ

「皆日本人は落したんですか

「ナニ日本人の渡韓してる奴は、食詰もの計りだから、金の煙管などは理事官か銀行の支配人位の外は、夢にも見られないし、西洋人はアンナ煙管使はないしぞ

「スルト韓人ですか、韓人煙管はあんた持つ歸いつてある、洋銀の火皿の大きい、羅字の長いのじやありませんか

「スルト落とし主はないな、又剥けたハハハハ、ハハハハ

「フフフフ

「ソレカラ僕は新義州から安東縣へ渡ろうと思つて、鴨綠江へ出たぞ、コレは清國と韓國の境で、此江の上流は有名を鴨綠江の森林のあるところだ、日清兩國官憲の協立木材廠

はあるんだ、森林は七十里乃至百五十里の上流に跨つてあつて無盡藏と謂つてよい、三四月頃から十月頃迄製材するのだ、跡は雪氷だからナ、前年切り倒して置く翌年の雪解に、皆江へ流れ出るのだ、支那人は巨材を筏に組むで、支那庭の帆を張つて、青疊の様を江流に下して来るのは、中々よい風景だよ、筏上には小屋を建てあつて面白ひナ、重に松だが質は北海松の様で、木地が奇麗をから建築用材によいナ、安東縣は河岸にあるが、江口は浅いで巨船は一里下の朝鮮側の龍岩浦で荷役してるのだ、テ是れは大きき河で僕の渡つた日は風が烈しかつたで、大きい二萬噸位の軍艦は木の葉の散る様であつたよ、向ひ側を見ると龍は赤玉を嚙へて嘯ひて居るし、韓國側の山には虎は吼てるんだあいか、君方自家にある岸駒てふ人の畫いた、龍虎の掛物

知つてるだろう、あれよりかまたく中々エライ勢であた
 ナ、其時候は十錢で朝鮮の小舟の渡守に渡して貰つたんだ
 應」その大軍艦は浅い江口を跳び越へて、入つて来たのですか
 群」ハハハハ又剝たかハハハハ

眷」フフフフ

眷」安東縣から汽船で大連へ向ふたが、大連の棧橋には驚いた
 ナ、二十七哩海中へ突き出てあるんだ、芝罘と棧橋の端と
 大孤山と直線にあつてるんだ、戦争があかつたあれば日本
 迄端を延長して来る露國の目算だ、長竿で雁かつとは此事
 だ棧橋の上に汽車が通つて、大連迄停車場七ツ程あるんだ
 有名を渤海に突き出てるんだから、棧橋の周邊は波は高ひ
 よ、露國は露國だエライことしたもんナ

應」熊とソナ風波のエライ處で荷役する様にしてあるんです

かつたて、ツンチャン、メントンハチエ、パントボーコチ
ユベツペ、と云ふ調子に遣るんだ、關羽武勇傳をすつかり
やるんだ、日本のと一ツで乞食同様の奴は、言ふてるんだ
から、聞料も安ひ僕は一日三十錢宛で、二日聞ひたが三國
志で見るとより、細い處まで言ふから面白い、節は日本のよ
りいな、僕も少し支那語を知つてると、一層面白いんだ
が支那語は僕は全くゼロだから

「支那人の阿保陀羅經は支那語じやあいのんですか」
群「ハハハハ支那語じや、全く僕に判らなかつた、又嘘か」

「ハハハハ支那語習つてその阿保陀羅經聞きたい子」
盆「ハハハハ、次はコウです」

「撫順に行つたら世界一と言はる、炭坑だよ、延長八里巾十
八丁、柱狀百三十七尺、純炭層百二十九尺、大したものだ」

、今滿鐵が經營してゐるんだよ、此石炭を有の儘で燃して置
けば五千四百年火が消へない、又一時に燃せば地球全面を
三時間火にする事は出来るよ、獨逸の鑛物博士ウィツク氏の
調査だ、僕は又大變都合のよい時に出くはして、此石炭
を一時に燃して見る時に撫順に行つたので、之を見た、有
丈掘出して燃したが、エライ火だあつよ、此邊も一面の火
にかつと思ふ子、又あつ月の廿日の午後だ

「スルト今ではモ一石炭を採掘して居らぬのですナ」
群「ナニ中々盛んに遣つてゐるんだ」

「デモ又あつ月一時に燃してしまつたんでしよう」
群「ハハハハ又嘘かハハハハ」

「ハハハハ」

「群」奉天の宮殿は立派だ子、建物中々見ものだせ、支那式の古

風を建方で、門は幾重いくじゆうにもなつてゐるんだ、其門は奥にあるほど段々に入口は小さくあつてゐるんだ、外形は同じだけれども、一番外な入口は五間四方形あるんだ、此門を入れば所藏の寶物を拜觀させて呉れるのだ、關羽の越中犢牛褌かど見せて貰つたよ、次の門は入口二間四方、次は五尺四方次は五寸四方、此門を入ると本當の宮殿、建物は古くあつてあつて掃除は行届いてあかつたナ、真中まんなかに御座所があつたが割合に質素だナ、その際まで行つて拜觀して来たよ

聽「五寸四方の門から、人は出入り出来るんてすか

群「ハハハハ又知れたかハハハハ

春「倍々面白くあつて来るナ

雀「群」鐵嶺昌圖を経て吉林に出たを、此邊では滿洲へ来た土産みやげに

、一ツ金礦か銀礦か發見してやろと思つて、吉林の周圍二十里の處まで、種々と探險したんだ、滿洲の富源てうものは争はれぬものじやナ、東經百廿八度三分廿二秒、北緯四十三度廿三分五秒の、交叉點を中心として、地下凡半哩の所から三哩の底まで、周圍五哩の金塊は屏風岩の様にあった、破れ目／＼に銀で鑄掛した様になつてゐるだ、僕は此金礦採掘の爲め再渡滿するんだ、皆採掘してしまつたら、世界の金價は十分一にゐるんだ

聽「地下のソナ遠い所を、ドウして見たのです

群「望遠鏡で、あざやかに見たんだ

聽「ハハア望遠鏡で地中が見へるんですか

群「ハハハハ一本いかけたナ、X光線エックスはまだそんな大仕掛のはあいらし、又剥げたナハハハハ

春「ホント面白いチー」

春「群」哈良賓にいつたナ、此處では露國思想の吾々の思想と大變
 を差違あるに、魂消させられたんだ、露國では名譽の退却
 と言ふのみならず、名譽の戰敗と言つてるんだ、僕の着賓
 の翌日哈良賓の公會堂で、露國各新聞社の極東通信員の大
 會があつたから、僕は駐賓本邦領事の紹介にて、傍聽に行
 つたを、問題は露軍戰敗彰功碑を、北極の中心に建設する
 釀金の相談だ、歐露では豫定百萬留の十六倍集つたのたか
 ら、チチハル以東の分擔十七萬留の三十倍にすることを、
 滿場一致で決議したのは痛快であつたナ

春「此頃新聞に出てるのに、北極探險は完全に出來ておいと
 言ふことですか

群「イカにもまだ北緯十度内へ、入つた探險者はおいらんだナ、

又刺げたナハハハハ

春「實に奇だチー」

春「群」ソレから貝加爾湖まで行つて見ようと思つたが、そんぞよ
 其處らの博士の腰拔の眞似する様になつたら困るからチ、
 千金の兒は盜賊に死せずだからね、君方判らむだろう、言
 つてる僕が解らんのだからナ、浦蘆へ出たんだ、浦蘆を中
 心として沿海洲何百哩の沿岸を、全部踏査して來たよ、處
 が露國の東方警備の嚴重あるに驚いたナ、お互に日本人は
 犢牛禪しめなければいけいよ、此沿海洲何百哩の沿岸は
 、ズーウと魚形水雷を波打際に並べてあるんだ、竹串に刺
 いた鰯の目刺同様にチ、コノ又水雷は危険だテ、ソノ体が
 震動した拍子に彈機に觸れたら、すぐドーオと爆發するん
 だからチ、アンナに密接させてあると一ツ爆發すれば、何

百哩に亘つてゐるのが、突差の順次にハせて、天地が砕けて
 しようからを、僕もこれが怖いので何百哩の間、差し足抜き
 足寶藏へ忍び入る足元で踏査したよ、

「沿海洲の海岸は、風波は一ツもなく鏡の様なんですか」

「ナニ名におふ日本海の沿岸だ、波の屈折は太洋のより烈し
 いんだ」

「スルトその波は水雷を動かさるのですか」

「君方の方は考へが早ひ子、イカにも激波は水雷を激動させ
 る子、僕等の差し足抜き足どころの騒ぎじやない子、又嘘
 を刺がされた子ハハハハ」

「フーム立派だ」

「それから北緯に流れて来た子、ナニ間島を一度見て置く氣
 にあつたから子、ナニ此處は何も知らずに喚く新聞屋や、」

御興かき政治家の此頃ワイワイ言つてゐる所だからな、ドン
 ナ事で騒いでゐるんかと面白半分に見たら、ヘン人を
 馬鹿にしてらァー、會寧貿易の殷盛、ナンド神戸一時間の
 取引高が會寧一ヶ年の總額に越えてらァー、食ひ詰政治パチ
 ルス連は大仰なこと言つて、人を騒がしやがらァー、コンナ
 處は支那のにしても、朝鮮のにしても、乃至は露國に呉れ
 て遣つても何の變鉄はあんだ、領土開拓ハハハハこん
 所に養力するから、列強の不機嫌を招くんだ、とコウ言つ
 てるどエラソウだが、僕は何んにも知らなんだハハハハ、
 ハハ、それよりか會寧の十里以南位の所へ来たら、ウオー
 とク言ふ聲がするでいか、よく考へると虎だあ、お出
 ただ新加藤清正、新鬼上官を知らいかと、今日は法螺も
 吹けるが其時はガッガタ顛ひよ、虎は人の二十倍走るのが

早いんだから困つたを、段々近くに從つて五匹の猛虎は、僕を遠攻めに押し寄せて來るであいか、一匹であるからば僕も譯あしに生捕つて、動物園に寄送するが何分五匹だからナ、甲に向へば他の奴は後から來る乙に向つても同様、仕方がないから隙を見計つてドンドン逃げたんだ、五匹の虎州ヲイー／＼つて追駈つて來るんだ、口で言はあいが其心だろうよ、元山迄逃て歸つたナ、五夜朝鮮宿で泊つたよ、走つても六日位かゝる道程だからナ、虎は虎で虎の木賃宿で泊つたらしかつたよ

聽「デモ虎は人の二十倍の早さで、駈けるじやないですか

群「ハハハハ又嘘の皮剝がれたナ

春「ハハハハ

盜「群「モ一ツ滿洲でのことを忘れてたよ、大石橋で泊やつたとき

の宿に蝸が澤山居つたナ、滿洲の蝸と言へばあんな怖いものがあるんだ、丁度蠶の平チヤバツた様を体で、兩頭の様に見へる二寸位の毒虫だ、奴に一ツ噛まれると命が危ないんだ、蝮蛇よりか毒がヒドイんだからネ、それを僕は澤山手で握み捕つて、酢味噌で食つたが、腮が落ちたナ

聽「捕るとき噛まれをかつたですか

群「ハハハハ、、、ソ一ダ此も嘘か……………コンナ實見談はまだ澤山あるが、又今度にしよう、口に肉刺が出来たからネハハハハ

とこふ言ふ風ですからね

春「ハハハハ中々快男子だ、イカにも韜晦してるとは能く見てあるナ、底に何處とをし貫目があるナ

盜「先日も私が群三君に出會つて、何か面白い話はあるかと聞くと

、嘘はあしでも岡はあくば澤山あるてんでしよ、何でもよいから一ツ二ツつて望むたら、コウ言ふんです

群雀サン南亞米利加のある處に、古代から今に生息する人間に似寄つた巨大ある動物は、一人イヤ一匹あるんですが、その動物は僅に肉眼で見得る鱗がありますが、その年に一枚宛増加して行くんですから、その鱗の数を算へたからば、何ヶ年間生存してるか明かにあるので、或る物數寄な隙を家があつて、此數を算へてるんですが、一日に十時間づゝ數へて、一日に五萬枚、一年に一千八百萬枚、百年に十八億枚、三千年に五百四十億枚、丁度今年で三千二年數へてるそうです、神武天皇サンの前三百卅餘年から代々の當主は、此數へ方を仕事にしているので、此後も算へ終る迄繼續するんだそうですが、目見當で見積つて見ると、

十分一位は算へ得てあるそうですが、すると五千四五百億年生存する勘定にあります、長息する動物もあればあるもの、又根氣強ひ家もあればあるものです、此家は鱗算家で中々の名家にあつてるそうです

群雀「フォーム大きき法螺を吹ひたものだナ」
雀「次は

群雀サン英國のスペンサーと言ふ大學者は、吾々の生息する地球は一千萬年の後には、彗星と衝突して滅亡してしまふと言つてますが、或る天文學者の説に、それは嘘だ、彗星は矢張軌道はあるから、ぶち附けに来ることは決してない爰に宇宙間に騒星と言ふのはあつて、是は星の氣狂だ、この星は永く狂ひ廻つて居るのだが、人間の氣狂でもフト一時正氣にゐることがある如く、この氣狂星フト正氣にあつ

たとき、人類の生息する一遊星を粉末にして、星体にふり掛けたらば狂病即座に平癒と言ふ、御間を引いて色々その在家を捜したところは、太陽系に地球と言ふものはあることを知つて、又氣が狂つたが、氣狂星の一念で一奴で、五千萬年以前から一日一千万哩の速力で、地球を目懸けて一ツ三昧に、駈け付け中であるが、今一千万年で此地球に到達するのだ、大小を比較するに、此星を梅ヶ谷の大きさとすれば、地球は六神丸の割合だと、コウ言つてるんです。雀サンお互にコンナ氣狂に出會はない間に、息災延命子孫長久をやつてしまつとか手ばだめですせてんです。

雀「フーム

雀「次はこうです

雀「雀サン小さいこともあればある者ですを、太陽系より八百

九〇三

目の恒星に地球の模型品とも言はるゝ、一物体があつて、人類其他動植物の生存、諸機關の具備等地球ソツクツのものがあるそうですが、その地球になつてゐる物体の大きさは此地球で希臘のアトム氏の發見した、分子の組成原アトム一ツと同一の大きさですと、だからその地球は中々何千倍と言ふ顕微鏡でなくては見へぬそうです、その上に萬事此地球上の物は、その小さい割合で具備してゐるは驚くじやありませんか、して其小地球でもこの地球でも同じく、無用を論文呈出したら博士號が貰へるそうで、蚤の翠丸の生殖作用の論文で、博士にあつてゐる者がありますとハハハハ、こんなこと計り言つてるんでしよう、まだくコンナことでも聞はかいから、幾個でも話すつて、此方が屏行ですがナ

雀「ソリヤ雀君中々高尚を話だ、時の無限と空間の無限と、大小の

無限とを引延ひきのばして説明した、寓意笑話だ。中々實のある話だ、終りの博士號に關する話で見ると、群三君の心機一轉は博士號に關して何か不満があるのじやないんかチー

『中々機才縦横で、ドンナ問題でもするりくくと、美味く説明して抜けますが、先達つて岩判安の爺サンに、證書を書直させられた時は流石の群三君も仕方があかつたさうです
『ドウしたのんかチー

『ナニあまた、あの安六爺は石に證文岩の判と言ふ位、堅意地かたいぢな人ですから、岩判の渾名あだなを頂戴してあるんですが、以前から少し宛小金を人に貸して居ますが、誰が借用證文差し入れても、自分が文字は讀めず、又人に讀むで聞かせて貰ふこともせず、借用主の人柄を信じて、證書は見もしないで、藏しまつて置くのですつて

『スツバリしたものだネー

『處が群三君が一寸金の入用があつたので、御父サンに内分で五百圓安六爺に借りることにしたのですつて、紹介人のナメクシ源は、群三君の證書持參で爺サン許へ行つたんです、スルト爺ぢが言ふに、源サン私も此迄證文は請取て置く丈で、讀んで見たことはないんですが、須藤サンの息子は千一と言はるゝ程に、嘘吐くと言ふから、跡で眞違があつては困るから、此分丈は一度讀んで聞かせて貰いたいと言ふのんですつて

『フムフム

『ソコで源公讀むで聞かせたら、萬一返濟せざる節は云々の處に至つて、爺サン嘴くちばしを入れて、サこんを嘘うそごと書いてあるから、讀むで貰つたんだ、アリヤ萬一じやない千一だ、千一返濟せざる節はと晝なほき直なほて貰はなければ金は渡さあい……………

はる、其次第は智殿は舉儀の前々夜又前夜、聳入の式と稱へて媒人の結納入の式と兼帯にて、近親者を伴ひ嫁の家に至りて、先方の家族親戚と略式の縁組の盃を交換し、小宴の饗を受くるあり、八合定も御多分並に、此方法を執ることに豫定しあるなり

日も近きて愈婚儀の前日即ち定公一世一代の聳入の日とありぬ、天竺は定公の親戚と結納の熨斗折等の準備も整ひ、愈出發の時刻とありぬ、此時刻は點燈頃先方着を豫測したる時刻あり、親戚も媒人も今夜は伊勢音頭節を、唄はざるべからずと自覺したるらし、伊勢音頭とは

唄ヤレナーエ、目出度めでいたーアーはーヨ掛ケ聲ヨイヨーイー
唄三イつーウ重をーりーてー掛ケ聲ハーヨーオイセ、ソーリヤセー
イ唄末でやつーウるかーアーめ、エ、五葉のオまーアーつ指ケ聲ア
ハレバイセーエ、コレバイツセ返シソリヤーヨイトーセー

の節に唄ふ俗謡にて、此地方にては如何なる慶事の宴會にても、専ら唄ひ習らされたる節にて、唄と言へば伊勢音頭節とする位の流行唄なり

八合定出發に當り天竺に向ひ

定「元八サン今晚は私も唄ふ（伊勢音頭と知るべし）のですか

元「ウーム、ソウダお前が唄はねばあらぬ場合には、乃公はお前の袖を一寸引張つて遣るからあー

定「よく頼むで置きますせ、手抜かりのあい様、今日は大切を日ですから

元「ヨシヨシ

此處に元州「お前は今晚は正賓だから唄ふに及ばぬ」と注意しやれば、事かきを得たりしに、惜きこととしてけり

一行は聳定公媒人元八、外に親族三人合計五人なり、大抵は縞の着

物に京博多の角帯、奉書袖紋付羽織の着流と言ふ着装にて、石ころ道に雪駄の裏金チャラつかせ、威勢よく乗込ぬ先方には今日の珍客に對し、鹿相おき様にとて、前日より鋤鋤田子犁までも取り片付け、厩までも掃除を行届かし、それ相應の馳走を準備し、御一行到達につき、一同それ相應の服粧にて出で迎へぬ、御八合定殿、一行に擁せられて堂々入り來り、上り框の所にて自己の穿き來れる雪駄の塵を、バタバタと打ち拂ひ、之を懐にせんとしける故、元八それでは失禮かりとて、急ぎ注意の爲め定公の袖を軽く引きしやくりければ、定公片足上り框に踏み懸けし儘、だみ聲高く伊勢音頭節

定「唄ヤレナイアエ、日出度めでたーアアはーヨ
丁稚庭の一隅にて小聲に掛聲「ヨイヨイイー
元八溜らず、制止の注意の心添にて、益々せわしく袖をしやりけれ

ば、八合定益々調を高め

定「唄三イつーウ重をーりーイイてーエ
元八あはてふためくも、せん術をし

和尚の留守に喋る本堂でもかいに

ルーズベルド（留守喋る堂）

無禮講ばかりする菴寺にも居らぬに

ブライアン（無禮菴）と言ふが如し

日本の戸籍に登録されてかいに

クルーベイ（九郎兵衛）とは是如何

夕暮に出て來る怠慢坊主でかいに

クレマンソー（暮、慢僧）と言ふが如し

物の莖くきが嫌いと言ふでもないに

思おも吉きち汗あせ（莖くきすかぬ）とはこれ如何に

貯蓄ちそくを國文で言つて居らぬに

枯か木こ兒ご（蓄たくわめるらん）と言ふが如し

大尾

跋

世人自分のことを棚に上げ置き、他のことを
彼是蔭口叩くは御勝手なり、自己の意に反す
る自他百般の事柄につき、真相を研めずして
或は怒り或は泣き或は罪ある笑を爲すも、亦
御勝手なり、人を傷け又は自分を高く賣らむ
ために、毒言虚言をほざき廻るも御勝手次第
なり、小心翼翼々に過ぎ、支柱なき雲の下に居

ニ
住するなることを、失念せらるも勝手御氣隨
なり、本書の跋までに、幾萬幾億の罪なき哄
笑微笑を濫發して心神を郭朗せらるゝも、亦
その撰ぶところなり、
苦笑冷笑失笑嘲笑罵笑等は、罪ある笑なり、
哄笑微笑は罪なき笑なり、孰れを擇ぶも干涉
の限りにあらず
人は調子外れのことに於てのみ、哄笑微笑を

發す、何人もその時代、その周邊の常識に恰
當したることに於て、哄笑も微笑も發し得ざ
るなり、而して常識外れの失策、品等の低き
惡戯等も、罪なき笑の種と爲すときは、崇高
なる美材となることを、忘るべからず、
右の通哄笑微笑の跋相違無之事と、馬云ふ否
鹿云ふ

豫 告

本書は二輯三輯漸次發行の豫
定につき續々御愛讀奉希候

明治四十二年初冬 秋平堂敬白

明治四十二年十二月十六日印刷
明治四十二年十二月二十日發行

定價五拾錢

著者 兼 發行者
大阪府泉南郡佐野村
第六千九百九十八番地
覺野秋平

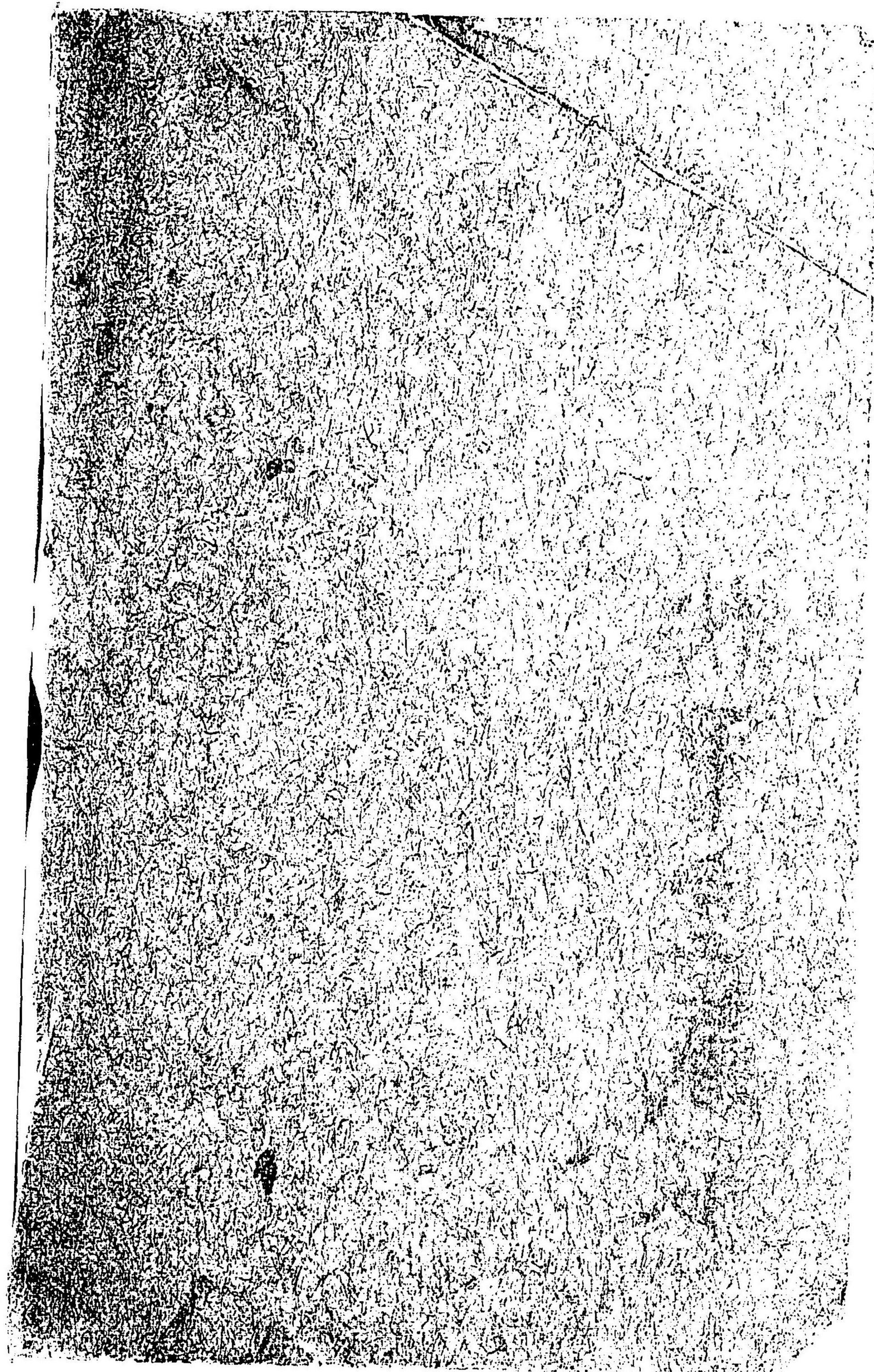
印刷者
大阪府西區江戸堀上
通二丁目百十二番邸
矢尾弘文堂

複製不許

發行所 秋平堂
大阪府泉南郡佐野村
第六千九百九十八番地

259
893





091641-000-4

特13-981

哄笑微笑

覚野 秋平 / 著

M42

DBO-0094

